2013年度　　CB

小　論　文

注　意

1. 問題は全部で4ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

以下の文章を読み，問いに答えなさい。

自殺は深刻な問題であり，また悲しい出来事だとほとんどの人が考える。さて，それでは，自殺について正確な知識を持って，予防のために適切なことができているだろうか？　この問いは，個人に対しても向けられているが，同時に国や自治体などの，より大きな対象にも向けられている。

自殺率は，急激な社会的変化を示す重要な指標のひとつとされており，とくに若年男性の自殺率が敏感に反応する。最近の世界の例では，ソビエト連邦の崩壊によって独立した国々がそうだ。バルト3国などでは当初，独立は希望をもたらし，いったんは自殺率が減少した時期さえある。ところが，希望が幻滅に取って代わられると，自殺率は一転して上昇した。

さて，日本の状況はどうだろうか。第2次世界大戦後の一時期，日本の自殺率は世界の中でもきわめて高かった。とくに(A)20歳前後の若い世代と高齢者層の2つに自殺率のピークを認めるパターンを示していた。

最近の実態については，1998年以降，年間自殺者数は3万人を超えたまま推移している(略)。この数は交通事故死者数の4倍以上にものぼる。高齢者層が高い自殺率を示している点は従来通りだが，近年とくに(B)40～50歳代の働き盛りの年代の自殺率が急増した。これは他の国々と比較しても，日本の自殺の大きな特徴と言える。

高齢者が高い自殺率を示すことは，ほぼ世界共通の問題として認識されている。また，急激に社会の価値観が変化する状況で若者の自殺率が上昇し，社会の関心を引き，国として積極的な対策に乗り出した例も世界では比較的数多い。ただし，日本のように働き盛りの世代の自殺率がこれほど急激に上昇に転じた例はほとんどない。

なお，働き盛りの世代の自殺が現在大きな社会的関心を集めているが，将来，これがさらに深刻な問題となりかねない点も真剣にとらえる必要がある。というのも，日本は近い将来，諸外国に比べてさらに高齢化した社会となることが必至であるからだ。

現在，深刻な自殺の問題を抱えている働き盛りの人々が，元来，自殺率が高い高齢者層になる。現時点でさえ，高齢者層の自殺は深刻な事態であるが，現在の40～50歳代の人々が今抱えている問題を引きずったまま，老年期へと突入していく可能性があるのだ。中高年の自殺の問題を直視して，適切な対策を取ることは，現在の，そして将来の日本のメンタルヘルスの最重要課題のひとつと言ってよい。

（高橋祥友『自殺予防』，岩波書店，一部表記を変更，下線は引用者）

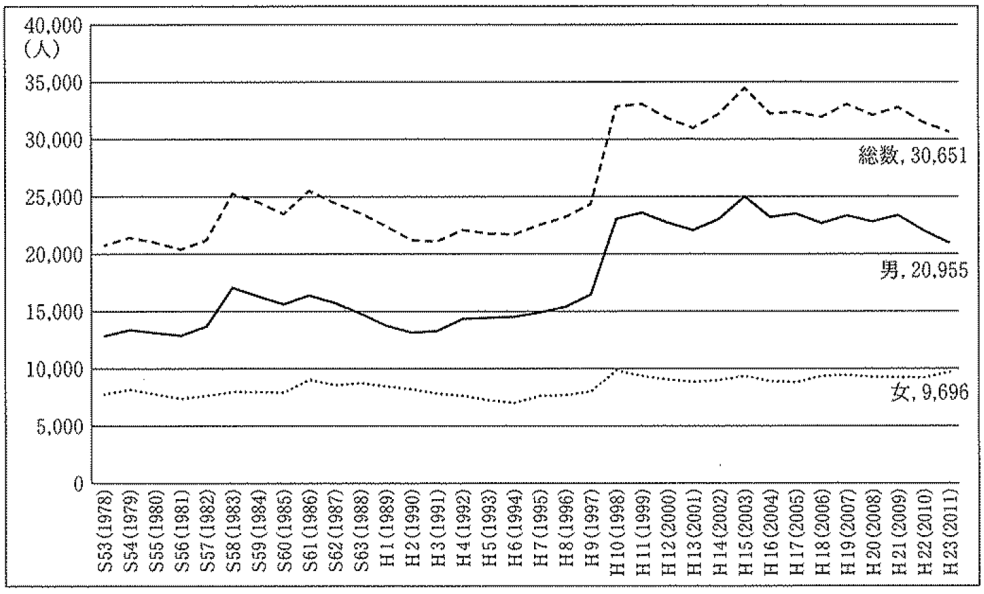
問　(A)若年層(20歳前後)と(B)中高年層(40～50歳代)について，あなたがいまどちらかの自殺防止対策を立案するとしたら，どちらの年代・要因について，どのような対策を立てるだろうか。(A)(B)いずれかを選択し，その自殺防止に関して有効と思われる対策について，以下の図表を参考に論拠を挙げながら，600字以上800字以内で論じなさい。

注　意

1. 解答用紙のA/B欄に「A」「B」いずれかを記入すること。両方について解答した場合は，最初に論述したもののみが採点される。
2. 本文は横書きとし，適切に段落分けをし，段落冒頭は1字下げること。カギ括弧やテン・マルなどの記号の使い方は，原稿用紙における原則どおりに行うこと。
3. 利用した図表については，記述内で図表番号を明記すること。

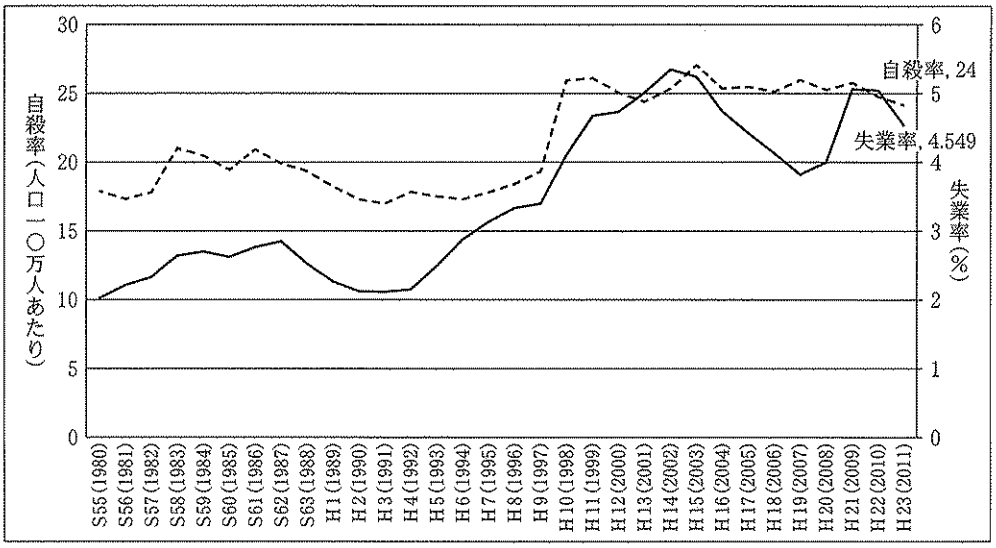
《図表》

図1　自殺者数の推移(自殺統計)



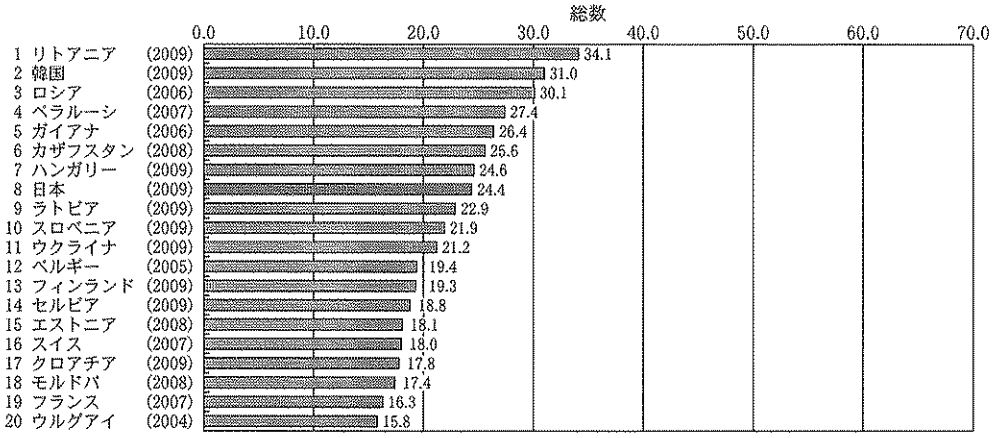
資料：警察庁「自殺統計」より内閣府作成

図２　自殺率・失業率の相関



資料：自殺率＝内閣府，失業率＝IMF — World Economic Outlook Databases より作成

図３　諸外国の自殺死亡率



資料：世界保健機関資料より内閣府作成

表１　原因・動機（６区分），年齢別自殺者数（自殺日ベース・2011 年確定値）

原因・動機	自殺者総数	総数	健康問題	経済・生活問題	家庭問題	勤務問題	男女問題	学校問題	その他	不詳
総数	30370	22415	14544	6336	4515	2668	1130	427	1601	7955
20歳未満	620	426	139	23	86	33	59	186	40	194
20—29	3275	2411	1178	453	348	502	378	230	209	864
30—39	4410	3285	1889	858	749	695	334	8	212	1125
40—49	5006	3782	2118	1407	887	694	209	3	221	1224
50—59	5325	3919	2310	1822	760	530	95	0	206	1406
60—69	5493	4112	2978	1379	755	178	41	0	289	1381
70—79	3665	2671	2293	338	534	33	13	0	222	994
80歳以上	2427	1799	1634	52	395	2	1	0	198	628
不詳	149	10	5	4	1	1	0	0	4	139

（備考）「原因・動機特定者」とは，少なくとも１つの原因・動機が特定されている自殺者。
原因・動機を３つまで計上可能としているため，総数と原因・動機別自殺者数の和は一致しない。

資料：内閣府「平成 23 年の地域における自殺の基礎資料」

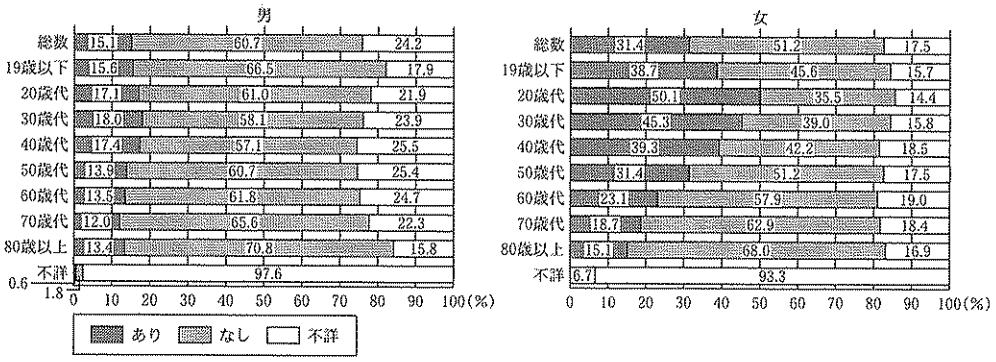
表２　死因順位別に見た年齢階級・死亡数・死亡率・構成割合（2010 年）

年齢階級	第１位				第２位				第３位			
	死因	死亡数	死亡率	割合（%）	死因	死亡数	死亡率	割合（%）	死因	死亡数	死亡率	割合（%）
10～14	不慮の事故	121	2.1	21.9	悪性新生物	116	2.0	21.0	自殺	63	1.1	11.4
15～19	自殺	451	7.5	31.7	不慮の事故	424	7.0	29.8	悪性新生物	150	2.5	10.5
20～24	自殺	1,372	21.8	49.8	不慮の事故	553	8.8	20.1	悪性新生物	217	3.4	7.9
25～29	自殺	1,630	22.8	47.4	不慮の事故	514	7.2	15.0	悪性新生物	372	5.2	10.8
30～34	自殺	1,920	23.4	39.7	悪性新生物	760	9.3	15.7	不慮の事故	570	6.9	11.8
35～39	自殺	2,345	24.2	31.0	悪性新生物	1,598	16.5	21.2	心疾患	756	7.8	10.0
40～44	悪性新生物	2,779	32.1	27.3	自殺	2,328	26.9	22.9	心疾患	1,106	12.8	10.9
45～49	悪性新生物	4,731	59.4	32.6	自殺	2,465	30.9	17.0	心疾患	1,735	21.8	11.9
50～54	悪性新生物	8,690	114.2	39.5	心疾患	2,636	34.6	12.0	自殺	2,615	34.4	11.9
55～59	悪性新生物	17,815	205.8	45.3	心疾患	4,674	54.0	11.9	脳血管疾患	3,185	36.8	8.1
60～64	悪性新生物	31,925	317.5	48.3	心疾患	8,069	80.3	12.2	脳血管疾患	5,180	51.5	7.8

※「悪性新生物」とは，広義の「がん」（肉腫，白血病なども含む）のこと。

資料：厚生労働省「人口動態統計」

図４　自殺未遂歴の有無別自殺者の割合（2011 年）



資料：警察庁「自殺統計」より内閣府作成